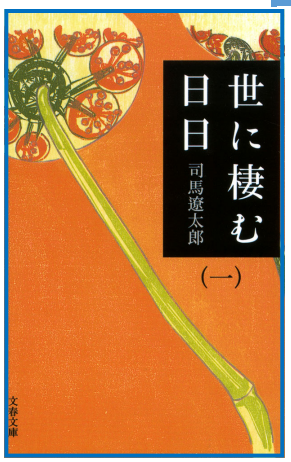
おすすめの図書

文春文庫（2003/3発売）
司馬遼太郎【著】文庫版/313p
文庫版715円（税込）Kindle版612円（税込）
※一巻の情報。価格は書店によって変わる可能性あり。



『世に棲む日日』（全４巻）

幕末、激動の社会において、まさに、現代社会が求める自発的行動力に満ちた主人公が躍動する

このLINEの記事を読んでいる皆さんは理系または理系志望の方が多いのではないでしょうか。日本においては欧米と比較して「文系」、「理系」の区分が明確なようで、私たちも自分は「文系人間」だとか「理系人間」だとか自ら進んでどちらかの分類に入りたがる傾向があるように思えます。高校、大学において「理系」を選択した方の中には「理系人間」を理由にするかのように文学、歴史等に興味を示さない方も多いように思えます。しかしながら、「文系」、「理系」は専門の部分で要求される能力や価値観が異なるかもしれませんが、根源の部分は「人間として同一」であり「文系」も「理系」もないはずです。理系または理系志望の方にも、広く、芸術・文学・歴史等に親しみ豊かな人間へと成長として欲しいと思っています。

ここで紹介する図書は幕末の長州藩を描いた歴史小説です。作家の司馬遼太郎氏は幕末を舞台にした小説を数多く書いています。「竜馬がゆく」、「翔ぶが如く」、「花神」、「燃えよ剣」、「峠」などがあり、おすすめの図書は「世に棲む日日」です。この小説の主人公は吉田松陰と高杉晋作です。吉田松陰は30歳、高杉晋作は29歳でこの世を去るわけですが、この2名の30年間はあまりも凝縮された人生でした。吉田松陰は松下村塾において幕政から明治維新への変革に尽力した多くの若者に影響を与えました。その松下村塾の門下生の双璧が高杉晋作と久坂玄瑞でした。

高校で学ぶ日本史では長州藩と言えば木戸孝允（桂小五郎）が代表的な人物となっていますが、木戸孝允が明治政府に強く関与したからであり、明治維新を成し遂げた功労者はむしろ吉田松陰であり、高杉晋作であることは疑いのない事実でしょう。二人とも数々の困難と障害に遭いながらも、自らの意思を貫き行動し、その力が社会を動かすに至ったと考えられます。

この小説において吉田松陰は「思想家」、高杉晋作は「現実家」として描かれています。吉田松陰は安政の大獄に巻き込まれ命を絶ちますが、その後、8年間、自らの命を削るが如く「思想家」の吉田松陰の教えを受けた高杉晋作が「現実家」として幕政から明治維新への変革を導きます。高校の教科書では「薩長が中心となり倒幕を成し遂げた」と記されていますが、長州藩内部の抗争に対してはあまり触れられていないようです。長州藩には幕府に恭順しようとする保守派である「俗論派」と改革派の「正義派」の2つの派閥が存在し抗争を続けていました。「世に棲む日日」を読むと、薩長同盟の実現、もっと極端に言えば明治維新の実現の原点が、無謀に見えながら実は計算された、弱冠27歳における高杉晋作の功山寺の挙兵にあったことを知ることができます。功山寺の挙兵こそが藩内において極端に劣勢にあった「正義派」を蘇らせ長州藩が薩長同盟を結ぶに至ります。

現代社会は混沌としています。とても安定していると思っていた会社がリストラを断行したり外資系の会社に買収されるようなケースも増えています。今こそ、一人一人が自らの意思で行動できる能力と判断が要求されるでしょう。「世に棲む日日」の登場人物は、自らの意思で行動し明日を切り開く能力を持った人物に満ち溢れています。是非、一読されて今までの自分と今後の自分について考えてみてください。

（東京都市大学　田口　亮）

Copyright © 2021 The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers